

『ローマの信徒のみなさんへ』私訳 (II)

— 承前 —

阿 部 包

前号 (第5号) に掲載した『ローマの信徒のみなさんへ』(I) に続いて、その (II) を掲載する。今回は、6章から8章までである。小見出しを列記すると次のとおりである。〈罪に死んでキリストに生きる〉、〈義に仕える〉、〈結婚の比喩〉、〈わたしのうちに棲みつく罪〉、〈霊における命〉、〈来るべき栄光〉、〈神の愛〉。

なお、前回、「三回に分けて掲載する予定」と書いたが、四回分載に変更し、次回 (第三回) を9章～11章とし、最終回 (第四回) を12章～16章としたい。脚注は、前回からの通し番号である。今回で『ローマの信徒のみなさんへ』前半部が終了する。

ローマの信徒のみなさんへ

6

〈罪に死んでキリストに生きる〉

1では、わたしたちは何と言いましょうか「恵みがもっと増えるように、罪に留まり続けましょう」ですか？ 2断じて否、です。罪に対して死んだわたしたちが、どうして今なお罪の中で生きるのでしょうか。3それとも、あなたがたは知らないのですか。洗礼を受けてキリスト・イエスと一つになったわたしたちは皆、その同じ洗礼を受けてその死と一つになったのです⁸⁵。4実に、わたしたちは洗礼をとおして彼と一緒に葬られ、その死と一つになりました。それは、キリストが父の栄光によって死者たちの中から立ち上がらせられたように、わたしたちもまた命の新

しさに包まれて歩む⁸⁶ ためなのです。5 なぜなら、もし、わたしたちが(彼と)一体となってその死の似像に⁸⁷ なったとすれば、復活の似像にもなるはずだからです。6 次のことをわたしたちは知っています。すなわち、わたしたちの中の古い人間が(彼と)共に十字架に掛けられた結果、罪の体が滅ぼされ、わたしたちが罪の奴隷となることはもう二度とありません。7 なぜなら、死んだ者は罪から無罪放免されている⁸⁸ からです。8 しかし、もしわたしたちがキリストと共に死んだとすれば、わたしたちは彼と共に生きることにもなるだろうと信じています。9 それは、死者たちの中から立ち上がらせられたキリストがもう二度と死なず、死がもう二度と彼を支配しないことを知っているからです。10 なぜなら、彼が死んだあの出来事は、罪に対してただ一度限り死んだのであり、一方、

⁸⁵ 原文は *hosoi ebaptisthēmen eis Christon Iēsoun, eis ton thanaton autou baptis-thēmen*。「洗礼を受けた」との関連で *eis* をどう訳すかだが、青野太潮訳(岩波版)は「へと(洗礼を受けた)」, 協会訳は「にあずかる」とし、新共同訳は前者を「と結ばれるために」、後者を「にあずかるために」、フランススコ会聖書研究所訳は「一致した」, 「あずかる」, 新改訳は「につく」, 「あずかる」とそれぞれ訳し分ける。青野訳はむしろ直訳で “baptized into” という英訳の姿勢に近い。

⁸⁶ 原文は *en kainothēti zōēs peripatēsōmen*。青野太潮訳(岩波版)「命の新しさにおいて歩む」, 新共同訳「新しい命に生きる」, フランススコ会聖書研究所訳「新しいいのちに歩む」。本田哲郎訳「新しいいのちを帯びてあゆむ」。7章6節「霊の新しさに包まれて(仕えている)」*en kainothēti pneumatōs (douleuein)* 参照。

⁸⁷ 原文は *tō homoiōmati tou thanatou autou*。 *homoiōma* は、新約では、黙示録9:7以外はパウロのみの用例。ここの他にローマ1:23, 5:14, 6:5(復活の似像), 8:3, フィリピ2:7。

⁸⁸ 原文は *dedikaiōtai*。通常は「解放されている」と訳される。青野太潮訳(岩波版)は「〔解放されて〕義とされている」。7節の背景には、ユダヤ社会に広く共有されて諺で表現されていた知恵が横たわっていると言われる。それらの一部は後にバビロニア・タルムードに収録されることになる。次を参照。「人は死ぬと、律法を果たす義務から解放される」(バライタ, シャバツ編151^b)。「死んだ者はみな、その死をとおして罪の贖いを得る」(民数記シフレ, 15:31に関する)。cf. J. D. G. Dunn, *Romans 1-8*, *Word Biblical Commentary* 38_A, pp. 320f., J. A. Fitzmyer, *Romans*, *The Anchor Bible* 33, pp. 436f.

彼が現に生きているのは、神に対して生きているからです。11 こういうわけだから、あなたがたも、自分たちを罪に対しては死んだ者、キリスト・イエスにあって神に対して生きている者と考えなさい。

12 それゆえ、あなたがたの死ぬべき体の中で罪が支配するに任せて、体の欲望に服従してしまうことがないようにしなさい。13 また、あなたがたの体の諸々の部分⁸⁹を不義の武器として罪に献げるのではなく、むしろ、自分たち自身を、言わば死者たちの中から命をいただいた者として神に献げ、あなたがたの体の諸々の部分を義の武器として神に献げなさい⁹⁰。14 なぜなら、罪は決してあなたがたを支配しないからです。あなたがたは律法の下ではなく恵みの下にいるのですから。

〈義に仕える〉

15 それでは、どうなるでしょう？ 「わたしたちは律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯しましょう」ですか？ 断じて否、です。16 あなたがたは知らないのですか。あなたがたが奴隷として身を献げて誰かに聴き従えば⁹¹、あなたがたは自分が聴き従うその人の奴隷となるのです。罪の（奴隷）として死に至るか、聴従の（奴隷）として義に至るか？ 二つに一つです。17 しかし、神に感謝しましょう。あなたがたは、以前は罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの模範に心から聴き従って、18 罪から解放され、義に仕えることになった⁹²のですから。19 わたしは、あなたがたの肉の弱さの故に、人間的に話しています。あ

⁸⁹ 原文は *melē*。新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳、本田哲郎訳は「五体」、協会訳、青野太潮訳（岩波版）は「肢体」、新改訳は「手足」、英訳は“members”が一般的、Dunn は“mortal body”。

⁹⁰ 「道具」(*hopla*, pl.)。単数形は「道具」一般を指すが、複数形では特に「武器、武具」を指す。パウロでは、他にローマ 13：12, 2 コリント 6：7, 10：4。

⁹¹ *eis hypakoēn* を結果として訳した。青野はこれを直前の *doulos*（奴隷）にかけて、「従順へと到る奴隷」（直訳）を経て「従順な奴隷」と訳している。目的と解するのはフランシスコ会聖書研究所訳（「従うために」）、新共同訳も結果と解する（「従えば」）。パウロは、そもそも人間を何ものかに聴き従う存在と捉える。神の似像たる被造物として、神に聴き従うことこそ人間の本来的姿で、他は逸脱に他ならない。

あなたがたが、かつて体の諸々の部分を仕えるものとして⁹³ 汚れと不法に
 献げ、不法に陥ったように、ちょうどそのようにして今、あなたがたは、
 体の諸々の部分を仕えるものとして義に献げ、聖なるものとなりなさい。
 20 あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義に関しては解放されていま
 した。21 では、そのときあなたがたはどんな実りを得ていたでしょう
 か。それらは、今あなたがたが恥ずかしいと思っているものでした。な
 ぜなら、それらの結果⁹⁴ は死だからです。22 しかし、今やあなたがたは
 罪から解放されて神に仕えるものとなり、聖なるものとなるというあな
 たがたの（真の）実りを得ています。その結果は永遠の命です。23 なぜ
 なら、罪の報酬は死ですが、神の賜物はわたしたちの主キリスト・イエ
 スの内にある永遠の命だからです。

7

〈結婚の比喩〉

1 それとも、兄弟のみなさん、あなたがたは知らないのですか。あなた
 がたが律法を知っている人々だからわたしは言うのですが⁹⁵、律法が人

⁹² 「罪から解放され、義に仕えることになった」は、原文では *eleutherō-
thentes de apo tēs hamartias edoulōthēte tē dikaiosynē*。「解放」は「自
 由」と、「仕える」は「奴隷」と語源を同じくしている。

⁹³ 「仕えるものとして」は、原文では *doula*。新共同訳、フランシスコ会聖書
 研究所訳、新改訳、青野太潮訳はいずれも「奴隷として」、協会訳は「僕とし
 て」と訳す。19 節は内容的に 13 節と並行関係にある。前半の *eis tēn
anomia* と後半の *eis hagiaimon* の扱いで訳文は分かれる。新共同訳は
 「……不法の中に生きていたように、……献げて、聖なる生活を送りなさい。」
 フランシスコ会聖書研究所訳は「……ささげ、神の法に背く者となったよう
 に、……ささげ、聖なるものとなりなさい。」青野太潮訳は「(不法と) 不法
 へと到る (穢れとに仕える奴隷として) あなたがたが献げたように、聖さへ
 と到る (義に仕える奴隷として) 献げなさい。」青野の前半の扱いは無理があ
 る。また、前半と後半が対構造になっていることも考慮しなければならない。

⁹⁴ 「結果」と訳したのは *telos*。22 節の「結果」も同じ。

⁹⁵ 原文は *agnoeite, adelphoi,* と *hoti* 以下の副文の間に位置する挿入句、
ginōskousin gar nomon lalō. gar のニュアンスを出すために若干意識した。

間を支配するのはその人が生きている間だけです。2 夫のもとにある⁹⁶ 女は、律法によって存命中の夫に縛られています。夫が死ぬと、夫の律法から解かれます。3 こういうわけで、夫の存命中にもし他の男に身を任せれば⁹⁷、その女は姦通の女と呼ばれますが、もし夫が死ねば、その律法から解放されているので、他の男に身を任せても彼女は姦通の女ではありません。4 ですから、わたしの兄弟のみなさん、あなたがたも、キリストの体をとおして律法に関しては既に死んで、他の方、すなわち、死者たちの中から立ち上がらせられた方に身を任せることができるようになります。お陰でわたしたちは神の目に適う⁹⁸ 実を結ぶことができますのです。5 なぜなら、わたしたちが肉の手の内にあつたとき、罪の欲情が律法をとおしてわたしたちの体の諸々の部分の中に働いていた結果、わたしたちは死に値する実を結んでいたのですが、6 しかし、今や、わたしたちがその中に拘禁されていた律法からわたしたちは解かれて、死にました。こうして、わたしたちは、霊の新鮮さに包まれて（神に）仕えているのであり、文字の古さに頼って（死に）仕えているではありません⁹⁹。

⁹⁶ 原語は *hypanndros* という形容詞。新約聖書での用例はここ一箇所（所謂 *hapax legomenon*）である。法的に夫の管理下にあることを意味し、通常は「結婚している」と訳される。むしろ「結婚して夫の管理下にある女」と説明的に訳したほうがいいかもしれない。明らかに、パウロはユダヤの律法に基づいて議論を展開している。当時シャンマイ派とヒレル派との間で戦わされていた申命記 24 章 1 節に関する議論をパウロは知っていた（cf. J. D. G. Dunn, *op. cit.*, p. 360）。申命記 24：1～4，民数記 5：11～31，等参照。この単語自体は LXX に 6 回用いられている。民数記 5：20, 29；箴言 6：24, 29；シラ書 9：9, 41：21。2 節については、1 コリント 7：39 参照。われわれの 2～3 節の内容と関連して、逆の立場から記すレビ記 18：20, 20：10 も参照。

⁹⁷ 3 節から 4 節にかけて「に身を任せれば」「に身を任せても」「に身を任せること」と訳したのは、与格と用いられた *genētai, genomenēn, to genesthai* である。フランシスコ会聖書研究所訳および青野太潮訳は、「のものとなる」、新共同訳は前二者を「一緒になる」、キリストとの関係では「ものとなる」と訳し分ける。

⁹⁸ 「神の目に適う」の原語は *tō theō* という与格形。5 節の「肉の手の内」は *en tē sarki*。「死に値する」は *tō thanatō* という与格形。

〈わたしのうちに棲みつく罪〉

7では、わたしたちは何と言いましょうか。「律法が罪である」ですか？断じて否、です。しかし、律法をとおさずには、わたしが罪を知ることにはなかったのです。なぜなら、もし、律法が「(あなたは)欲してはならない」と言っていなかったら¹⁰⁰、わたしが欲望を知ることにはなかったからです。8しかし、罪は戒めをとおして機会を捉え、わたしの中にあらゆる欲望を生み出しました。なぜなら、律法と無関係¹⁰¹ならば、罪は死んでいるからです。9ところで、わたしはかつて律法と無関係に生きていました。しかし、戒めの到来とともに罪が生き返って、10わたしは死にました。そして、わたしは、命に導く戒めが死に導くものであること¹⁰²を発見したのです。11実は、罪が戒めをとおして機会を捉えてわたしを騙し、その戒めをとおして(わたしを)殺していたのです¹⁰³。12ですから、律法は聖なるものですし、戒めもまた聖なるもの、義しいもの、善いものなのです¹⁰⁴。13では、善いものが、わたしにとって死となったのでしょうか。断じて否、です。そうではなく、結果としてそれが罪であることが明らかになるように¹⁰⁵、罪が、善いものをとおしてわたしのために死を生み出したのです。こうして、罪は戒めをとおして途方もなく罪深くなりました。

⁹⁹ 6節後半部、「霊の新しさに包まれて」は en kainotēti pneumati, 「文字の古さに頼って」は palaiotēti grammatos という与格形。原文には「仕えている」douleuein は当然繰り返されていないし、(神に)、(死に)も文脈上補ったもの。

¹⁰⁰ 出エジプト記 20 : 17, 申命記 5 : 21, ローマ 4 : 15 参照。

¹⁰¹ 原語は chōris nomou。通常は「律法が無ければ」と訳される。直後の9節の他にローマ 3 : 21 参照。3 : 28 の chōris ergōn nomou, 4: 6 の chōris ergōn も参照。

¹⁰² レビ記 18 : 5, ソロモンの詩編 14 : 2, 創世記 2 : 17, 3 : 13 参照。さらに2コリント 11 : 3 参照。

¹⁰³ 創世記 3 : 13 参照。さらにローマ 5 : 12~13, 2コリント 11 : 3 参照。蛇に騙されて神の禁止命令に背き、善悪の知識の木から取って食べた結果、人は死を必然的な自らの定めとして受け入れざるを得なくなった。

¹⁰⁴ 詩編 19 : 7~10 (新共同訳 19 : 8~11), 4エズラ 9 : 37, レビの遺訓 14 : 4 等参照。

14 実際、わたしたちは、律法が靈的なもの¹⁰⁶であることを知っていますが、わたしは肉の体であり罪の下に売り渡されています¹⁰⁷。15 なぜなら、自分が生み出していることをわたしは知りませんし、また、自分が望んでいることを実行せずに、逆に自分が憎むこと¹⁰⁸をしているからです。16 しかし、もし、自分が望んでいないことをわたしがしているとすれば、わたしは、律法に同意して、それを良いものと認めていることとなります。17 しかし、こうなると、それを生み出しているのはもはやわたしではありません。それは、むしろ、わたしの中に棲みついている罪です。

18 なぜなら、わたしの中には、すなわち、わたしの肉の中には、善いものが住んでいないことをわたしは知っているからです。なぜなら、良いことをしようと望む気持ちは常にわたしにあるのですが、実際にそれを生み出すことはないからです。19 実際、わたしは、自分が望む善いことはせず、逆に望まない悪いことを実行しています¹⁰⁹。20 しかし、もし、自分が望まないことをしているとすれば、もはや、それを生み出してい

¹⁰⁵ 原文は *hina phanē hamartia*。「罪がその正体を現すために」（新共同訳）、「罪が罪として現れるために」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「罪が露わにされるため」（青野太潮訳）。それが罪であることが誰の目にも現象的に分かるように、というニュアンス。その現象が「善いものをとおしてわたしのために死を生み出した」。1 コリント 15：56 参照。

¹⁰⁶ 14 節の内容の敷衍。神が与えた「聖なるもの、義しいもの、善いもの」である律法は、パウロにとっては同時に靈的なものでもある。靈的なものとしての律法には、神の意思そのものが反映されており、10 節で「命に導く戒め」と呼ばれている。

¹⁰⁷ 「肉の体であり」と訳したのは *sarkinos eimi*。「肉につける者であって」（協会訳）、「肉の人であり」（新共同訳）、「『肉』の弱さをまとった人間で」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「肉的な者であり」（青野太潮訳）、「罪ある人間であり」（新改訳）。「罪の下に売り渡されています」については、LXX 訳イザヤ 50：1、列王記 21：20, 25、1 マカバイ 1：15、参照。

¹⁰⁸ 原文は *ho misō touto*。misō は「(わたしが) 憎む、忌み嫌う、したくない」。この句は 16 節で *ho ou thelō touto* 「自分が望んでいないこと」と言い換えられる。19 節も参照。詩編 36：2, 45：8, 97：10, 101：3, 119：104, 113, 128, 163, 箴言 8：13, 36, 13：5, アモス 5：15, 参照。さらにガラテヤ 5：17 参照。

るのはわたしではなく、わたしの中に棲みついている罪です¹¹⁰。21 それで、わたしは律法を発見しました。良いことをしようと望んでいるその同じわたしの傍らに、常に悪いことがあるのです¹¹¹。22 なぜなら、わたしは、内なる人間としては¹¹² 神の律法に喜んで同意しているのに、23 それとは別の律法が、わたしの体の諸々の部分でわたしの理性の律法に抗して戦い、わたしの体の諸々の部分に潜んでいる罪の律法の中にわたしを捕虜にしているのを、見ているからです¹¹³。24 惨めな人間です、わたしは。誰が、この死の体からわたしを救ってくれるのでしょうか。25 しかし、神に感謝しましょう、わたしたちの主イエス・キリストをとおして(救ってくださるのですから)¹¹⁴。こういうわけで、わたし自身は、理性では神の律法に仕えながら、肉では罪の律法に仕えているのです¹¹⁵。

¹⁰⁹ ユダの遺訓 18：6，20：1 f.，アシェルの遺訓 1：3～9，マタイ 6：24 (神と富) および並行箇所，参照。特にアシェルの遺訓の 9 節「初めは善をしようとしながらも思いの宝庫が邪悪な霊で満たされているので、行為の結果は邪悪な方向に行ってしまう」を参照。

¹¹⁰ 18 節～20 節は内容的には 15 節～17 節の繰り返しに近い。エレミヤ 21：8，死海写本 1 QS (『宗規要覧』) 3：13～4：26，同 1 QH (『感謝の詩編』) 1：21～27，3：23 ff.，4：30 f.，ユダの遺訓 18：1～6，20：1～3，アシェルの遺訓 1：1～9，シラ書 15：11～17，等参照。

¹¹¹ 10 節と内容的に並行。「発見しました」(10 節：heurethē moi)－(21 節：heuriskō)，「命に導く」(10 節：eis zōēn)－「良いこと」(21 節：to kalon)，「死に導く」(10 節：eis thanaton)－「悪いこと」(21 節：to kakon)。10 節も 21 節も、律法に備わる二面性を強調している。二面性の実質的姿については続く 22～23 節で説明される。「わたしの傍らに、常に悪いことがあるのです」については、死海写本 1 QH (『感謝の詩編』) 1：27 (「人の子らには不義のわざと虚偽の行ないがつきものです。」参照。解釈を加えれば「わたしは律法がどういうものかを発見しました」。

¹¹² 原文は kata ton esō anthrōpon。「内なる」esō は、人間本来のあるべき姿、言わば墮罪以前の「神の似像」の形容で、人間の内にある神的かつ理性的要素に言及する際に用いられる。「内なる人間」の姿は詩編 119 編に見事にうたわれている。

8

〈霊における命〉

1 それで、今や¹¹⁶、キリスト・イエスの内にある¹¹⁷人々に有罪判決¹¹⁸はありません。2 なぜなら、キリスト・イエスの内にある命の霊の律法が、あなたを、罪と死の律法から解放したからです¹¹⁹。3 なぜなら、肉をと

¹¹³ 先に7章8節および11節で、パウロは、罪が戒めをとおして、人の中にあらゆる欲望を生み出し、人を殺す機会を捉えた、と述べた。21～25節に現れる *nomos* はいずれもユダヤの律法（トーラー）を指すと理解すべきである。新改訳以外の従来の日本語訳のように22節と25節だけを「律法」（神の律法）と訳し、その他を「法則」（新共同訳、青野太潮訳）、「原理」（フランシスコ会聖書研究所訳）と訳すのは、むしろパウロの議論の意図を混乱させるものであろう（協会訳の訳し方はさらに混乱している）。これについては、J. D. G. Dunn, *op. cit.*, pp. 392f. 参照。22～23節で描き出される神の律法と罪の律法の対比は、一つの律法の二面性の対比を示している。「内なる人間」が喜ぶ神の律法とは「別の律法」が「わたしの理性の律法」（これは少なくともパウロの二分法では「神の律法」と同じ領域に属しており、類義語である）に抗して戦っていて、その中に「わたしを捕虜にしている」と言う。文脈が示すとおり、「別の律法」は「罪の律法」と言い換えられている。「罪の律法」とは、罪によってそれが働く機会として利用された律法であり、そのようにして人間が実際に体験する律法の必然的な姿である。「潜んでいる」と訳したのは *en*。

¹¹⁴ 前節疑問文への答え。つまり、「（この死の体からわたしを救ってくださる）神に感謝」。そして、神がどのようにして救ってくださるかが「わたしたちの主イエス・キリストをとおして」で示される。

¹¹⁵ パウロは、7節以下の議論のポイントをまず22～23節で要約し、25節後半部で再度総括している。

¹¹⁶ 原語は *nyn*。終末論的用語。3：26, 5：9, 11, 6：19, 21, 8：18, 22, 11：5, 30 f., 13：11, 16：26, 参照。他に3：21, 6：22, 7：6, 17に用いられている *nyni* も参照。

¹¹⁷ 「キリストの内にある」は *en Christō Iēsou*。6章11節「罪に対しては死んだ者、キリスト・イエスにあつて神に対して生きている者」、同23節「神の賜物はわたしたちの主キリスト・イエスの内にある永遠の命」、参照。これを可能にするのは、同3節「洗礼を受けてキリスト・イエスと一つになったわたしたちは皆、その同じ洗礼を受けてその死と一つになった」という出来事に他ならない。

おして弱っていた¹²⁰ ために律法ができなかったことを、神が御自身の子を罪の肉の似像で¹²¹ 遣わし、贖罪の献げ物として¹²²、その肉において罪に有罪判決を下して下さったからです。4 それは、律法の義の定め¹²³が、肉に従ってではなく霊に従って歩んでいるわたしたちによって十全に果たされる¹²⁴ ためでした。5 なぜなら、肉に従っている者たちは肉の事がらに心に向け、霊に従っている者たちは霊の事がらに心向けるからです¹²⁵。6 肉が心向けること¹²⁶ は死で、霊が心向けることは命と平和です。7 というのは、肉が心向けることは神に対する敵意だからです。なぜなら、それは神の律法に現に従わないからですし、また、従うこともできないからです。8 肉の圏内にある者たちは、神に喜ばれる

¹¹⁸ 原語は *katakrima*。同じ言葉をパウロは 5 章 16 節と 18 節で用いた(新約では、この 3 箇所だけ)。当然ながら、聴き手(読者)は 5 章 12~21 節で既に対照的に展開されたアダムの時代とキリストの時代を想起するであろう。前者のキーワードは罪・死・有罪判決、後者のそれは恵み・永遠の命・義である。ただし、5 章 18 節の訳では「有罪宣告」としていた。

¹¹⁹ 7 章 12 節, 14 節, 22~23 節を参照。「命の霊の律法」は「内なる人間」が喜ぶ神の律法であり、「わたしの理性の律法」とも呼ばれうる。「罪と死の律法」はこの世で生きる人間にとっては、肉の弱さの故に罪に利用されてしまう現実的な律法の姿である。注 106, 113 も合わせて参照。命と霊の結合については、創世記 6 : 17, 詩編 104 : 29 f., エゼキエル 37 : 5 f., トビト 3 : 6, 2 マカバイ 7 : 23, 参照。因みに、協会訳, 青野太潮訳は 2 節の *nomos* をいずれも「法則」と訳す。

¹²⁰ 6 : 19, 8 : 26 参照。肉の弱さは人間の現実的姿と同時にアダムの時代への帰属性を指す。

¹²¹ 原文は *en homoiōmati sarkos hamartias*。5 : 12~21 を背景とするアダム・キリスト論的言葉。

¹²² 原文は *peri hamartias*。「贖罪の献げ物として」の LXX 訳を背景とする。レビ記 5 : 6 f., 11, 16 : 3, 5, 9, 民数記 6 : 16, 7 : 16, 歴代誌下 29 : 23 f., ネヘミヤ 10 : 33, エゼキエル 42 : 13, 43 : 19, 等参照。cf. J. D. G. Dunn, *op. cit.*, p. 422.

¹²³ 原文は *to dikaiōma tou nomou*。複数形で 2 章 26 節にも出る。「律法の義の要求」の訳語も可能。

¹²⁴ 「十全に果たされる」と訳した原語は *plērōthē*。「満たされる」(協会訳, 新共同訳, 青野太潮訳), 「成就される」(フランシスコ会聖書研究所訳), 「全うされる」(新改訳)。

ことができません。9しかし、もし神の霊が本当にあなたがたの内に住んでいるのであれば、あなたがたは肉の圏内にあるのではなく、霊の圏内にあるのです。また、もしだれかがキリストの霊を持っていないとすれば、その人はキリストのものではありません。10しかし、もしキリストがあなたがたの内におられるとすれば、体は罪をとおして死んでいても、霊は義¹²⁷をとおして命なのです。11また、もしイエスを死者たちの中から立ち上がらせた方の霊があなたがたの内に住んでいるとすれば、キリストを死者たちの中から立ち上がらせた方は、あなたがたの内に住んでいるご自身の¹²⁸ 霊をとおして、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてくださるでしょう¹²⁹。

12 こういうわけで、兄弟のみなさん、わたしたちが負っている責務は、肉に従って生きるという肉に対するものではありません。13 実際、もしあなたがたが肉に従って生きているのであれば、あなたがたは必ず死にます。しかし、もしあなたがたが霊によって体の行ないを殺していれば¹³⁰、あなたがたは生きるでしょう。14 なぜなら、神の霊に導かれる人は皆、神の子だからです。15 なぜなら、あなたがたは再び恐れに陥れる奴隷の霊を受けたのではなく、むしろ養子にさせていただく¹³¹ 霊を受けた

¹²⁵ 「肉に従っている者たち」 hoi kata sarka ontes と「霊に従っている者たち」 hoi kata pneuma (ontes) は、前節の言葉 tois mē kata sarka peripatousin alla kata pneuma から二つ目の否定詞 mē を削除して言い換えたもの。「心に向け」と訳したのは phronousin。「考え」（新共同訳）、「思い」（協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳、本田哲郎訳、青野太潮訳）、「もっぱら考え」「ひたすら考えます」（新改訳）。14：6 の場合のように「重んじ」と訳すことも可能。

¹²⁶ 「肉が心に向けること」と訳したのは to phronēma tēs sarkos、次に出る「霊が心に向けること」は to phronēma tou pneumatōs。通常は「肉の思い」「霊の思い」。次の英訳も参照。“the way of thinking”(J. D. G. Dunn, op. cit.), “the concern”(J. Fitzmyer, op. cit.), “the mind-set”(B. Byrne, S. J., *Romans*, SACRA PAGINA 6) 「肉が重んじること」「霊が重んじること」も可能。

¹²⁷ 贖罪の献げ物として現れたキリストの義。3：22～25、7：3、参照。

¹²⁸ 原語は autou で、節の前半に出る tou egeirantos ton Iēsoun ek nekron を受ける。そこで、意味上「ご自身の」と訳した。

¹²⁹ 10～11 節については、1 コリント 6：14、15：45～49 参照。

からです。この霊に包まれて、わたしたちは「アッバ、お父さん」と叫んでいます。16 この霊自身が、わたしたちが神の子らであることを、わたしたちの霊と一緒に証言しています。17 しかし、もし、子どもたちであれば、相続人でもあります¹³²。神の相続人、しかも、キリストと共同の相続人です。ただし、わたしたちが（キリストと）ともに苦難を耐え忍んで、ともに栄光をも受けることができれば、ですが。

〈来るべき栄光〉

18 実際、わたしの考えでは¹³³、今この時の苦難は、わたしたちに対して露わに示されようとしている、来るべき栄光とは比較するに値しません。19 なぜなら、被造物の切実な期待は神の子らの出現を待ち望んでいる¹³⁴からです。20 なぜなら、被造物は虚無に服従させられましたが、それは、自ら進んでのことではなく、むしろ服従させた方によることで、希望に基づいていたからです。21 それは、被造物自身も滅びへの隷従からやがて解放されて、神の子らの栄光の自由に浴する¹³⁵ というものです。

¹³⁰ ガラテヤ 5 : 24 「キリスト [・イエス] のものである人々は、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけたのです」、参照。「からだの行い」 *tas praxeis tou sōmatos* は、むしろ「肉の行い」 *tas praxeis tou sarkos* の方がパウロの議論の筋道から言って、納まりがいい。

¹³¹ 「養子にさせていただく」と訳したのは *hyiothesias*。 *hyiothesia* の属格形。直訳は「養子にすること、養子縁組」。「子たる身分を授ける」（協会訳）、「神の子とする」（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳）、「子としてくださる」（新改訳）、「子として生きる」（本田哲郎訳）、「子とされること」（青野太潮訳）。 8 : 23, 9 : 4, ガラテヤ 4 : 5, エフェソ 1 : 5, 参照。15 節後半部「養子にさせていただく……と叫んでいます」については、ガラテヤ 4 : 6 参照。

¹³² ガラテヤ 3 : 26, 29, 4 : 7, 参照。

¹³³ 原文は *Logizomai gar hoti*。

¹³⁴ 「待ち望んでいる」の原語は *apekdechetai*。同じ語の変化形は 23 節, 25 節にも出る。パウロでは他に 1 コリント 1 : 7, ガラテヤ 5 : 5, フィリピ 3 : 20。終末論的待望を表すキーワード。

¹³⁵ 「自由に浴する」の原文は、 *eis tēn eleutherian*。「自由にあずかる」（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳）、「自由に到る」（青野太潮訳）、「自由に参加するようになる」（本田哲郎訳）。

22 実際、わたしたちは、すべての被造物が今に至るまでともに呻き、ともに産みの苦しみを味わっていることを、知っています。23 しかし、彼らだけではありません¹³⁶。霊の初穂を持っているわたしたち自身もまた、養子にさせていただくこと、すなわち、わたしたちの体の贖いを待ち望みながら、自らの内部で呻いています¹³⁷。24 それは、希望によってわたしたちが救われたからです。しかし、目に見える希望は希望ではありません。なぜなら、自分が目で見ているものを、誰が希望するのでしょうか。25 しかし、もし、目に見えないものをわたしたちが希望しているのであれば、忍耐強くわたしたちは待ち望みます。26 同じように、霊もまた、わたしたちの弱さ¹³⁸を助けてくれます。なぜなら、わたしたちは何を祈るのが相応しいか¹³⁹知らないのですが、霊自身が言葉にならない呻きをもって執り成してくれるからです。27 心を探り究める方¹⁴⁰は、霊が心に向けることが何かを知っておられます。というのは、霊は神に従っ

¹³⁶ 「しかし、彼らだけではありません」の原文は、ou monon de。「被造物だけでなく」（新共同訳，フランシスコ会聖書研究所訳）、「それだけではなく」（協会訳）、「そればかりでなく」（新改訳）、「それのみならず」（青野太潮訳）、「そればかりか」（本田哲郎訳）。22節の主語を受けての発言なので、協会訳，新改訳，青野太潮訳，本田哲郎訳はいずれも不正確。

¹³⁷ 「霊の初穂」は、むしろ「霊という初穂」「初穂である霊」の意。「霊の」tou pneumatous という属格は同格あるいは補説的（epexegetic）用例。「初穂」が想起させるのは、第一に、収穫期に神に献げられた土地の最上の初物であろう。収穫の初物の祝いを中心とするのがシャヴオットの祭、所謂「七週の祭」、ペンテコステ（「五旬祭」）である。聖霊降臨がこの祭のときの出来事として初期キリスト者の間に記憶されていたことはよく知られている。出エジプト記 22：28，23：16，19，34：22，レビ記 2：12～15，22：10～21，民数記 15：20 f.，18：12 f.，申命記 16：9～12，26：1～11，歴代誌 31：5，ネヘミヤ記 10：36～38，使徒言行録 2章，参照。また、「自らの内部で」の原文は en heautois。「心の内で」（協会訳）、「心の中で」（新共同訳，フランシスコ会聖書研究所訳，新改訳）、「自分自身のうちで」（青野太潮訳）、「それぞれのうちで」（本田哲郎訳），“within ourselves”（J. D. G. Dunn, op. cit.），“inwardly”（J. Fitzmyer, op. cit.），“with respect to ourselves”（B. Byrne, S. J., op. cit.）。

¹³⁸ 「わたしたちの弱さ」は、6：19では「肉の弱さ」と表現されている、アダムの子孫である人間としての弱さ。他に 5：6，8：3，2コリント 13：4 参照。

て聖なる人々のために執り成すからです。28 しかし、わたしたちは知っています。すべてのことが共に働き合って、神を愛する人々に善い結果をもたらす¹⁴¹のだ、と。それは、この人々が計画に従って召されたからです。29 神は予め知っていた人々を、御自分の子の姿と同じ形になるように¹⁴² 予め定めてもおられました。それは、御子が多くの兄弟たちの中で最初に生まれた子¹⁴³ となるためでした。30 そこで、神は予め定めておられた人々を召し出し、そして召し出した人々を義とし、さらに義とした人々に栄光を与えられたのです。

¹³⁹ 「何を祈るのが相応しいか」の原文は *to (gar) ti proseuōmeta katho dei*。to は dei までの句全体にかかる。ti は祈り求められるものが「何か」ということであって、「どのように」祈り求めるかではない。「どのように」(フランシスコ会聖書研究所訳, 新改訳), 「どう」(協会訳, 新共同訳, 本田哲郎訳)。「何を」としているのは青野太潮訳で、「しかるべき仕方では何を祈るべきか」。J. D. G. Dunn, op. cit., J. Fitzmyer, op. cit., B. Byrne, op. cit. はいずれも「何を」と読む。

¹⁴⁰ 「心を探り究める方」の原文は *ho (de) eraunōn tas kardias*。サムエル上 16: 7, 列王上 8: 39, 詩編 7: 10, 17: 3, 44: 21; 139: 1-2, 23, 箴言 15: 11 等, また 1 コリント 4: 5, 使徒言行録 1: 24, 15: 8 等, 参照。「探り知る」(協会訳, 青野太潮訳), 「見抜く」(新共同訳), 「読み取る」(フランシスコ会聖書研究所訳), 「探り窮める」(新改訳), 「見通される」(本田哲郎訳)。パウロは 36 節で LXX 訳詩編 44: 22 (新共同訳では 23 節) を引用しているので、彼の念頭には直前の 21 節 (同 22 節) があつたはずである。

¹⁴¹ 「すべてのことが共に働き合って」の原文は *panta synergei*。「よい結果をもたらす」は *eis agathon*。ここでパウロはユダヤ教に特徴的な考え方を踏襲している。創世記 50: 20, シラ書 39: 25, 27。特に「これらすべては、信心深い人々には善いものとなる」*tauta panta tois eusebesin eis agatha* (Sir 39: 27) 参照。Cf. J. D. G. Dunn, op. cit. p. 481, J. Fitzmyer, op. cit. p. 522f.

¹⁴² 「御自分の子の姿と同じ形になるように」の原文は *symmorphous tēs eikōnos tou hyiōu autou*。「神の子の像と共なるかたちをもつ者たちとして」(青野太潮訳), 「御子のかたちに似たものとしようとして」(協会訳), 「御子の姿に似たものにしようとして」(新共同訳), 「御子の姿に似た者に」(新改訳), 「おん子の生き写しになるようにと」(フランシスコ会聖書研究所訳), 「御自分の子と同じ姿にしようとして」(本田哲郎訳) “conformed to the image of his Son” (J. D. G. Dunn, J. Fitzmyer), “sharers in the image of his Son” (B. Byrne)。symmorphos についてはフィリピ 3: 21 参照。具体的には、復活したキリストの姿と同じ形になること。

〈神の愛〉

31 では、これらのことについて、わたしたちは何と言いましょうか。もし、神がわたしたちの味方なら、誰がわたしたちの敵でしょう¹⁴⁴。32 ご自身の子さえ惜しまずに、むしろわたしたちすべてに味方してその子を引き渡された方が、どうして、その御子に加えてすべてのものをわたしたちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか¹⁴⁵。33 だれが神に選ばれた人々を告訴する¹⁴⁶ でしょうか。義とする方は、神なのです。34 有罪判決を言い渡すのは誰ですか¹⁴⁷。キリスト [・イエス]、死んだ方、いや、むしろ立ち上がらせられた方である彼こそ、神の右におられる方、

¹⁴³ 「最初に生まれた子」の原語は *prōtotokon*。「初子」「長子」と訳される。背景には旧約における初子に関する規定がある。初子の所有権は神に属し、神の前で聖別されなければならない。出エジプト記 13：1 f., 11 ff., 22：28, 34：19, 民数記 18：15 ff., 申命記 15：19 ff., 参照。神はイスラエルについてこう呼ぶ。出エジプト記 4：22, エレミヤ 31：9, 詩編 89：28, ソロモンの詩編 13：9, 18：4, エズラ(ラテン語) 6：58, 参照。29 節との関係で、「最初に生まれた子」は「最初に新しい命に生まれた子」すなわち「最初に復活した子」という意味を内包している。コロサイ 1：15, 18, ヘブライ 1：6, 12：23, 参照。

¹⁴⁴ 「わたしたちの味方」は *hyper hēmōn*, 「わたしたちの敵」は *kath' hēmōn*。

¹⁴⁵ 「どうして」以下の原文は *pōs ouchi kai syn autō ta panta hēmīn charisetai*。*syn* を「に加えて」と若干意識し、また *charisetai* (<*charizomai*) を *charis, charisma* (恵み) との関係が訳語にも表れるように、敢えて「恵んでくださる」と訳した。

¹⁴⁶ 「告訴する」の原語は *enkalesei* (<*enkaleō*) で、法律用語。「告訴する、告発する」。「神に選ばれた人々」はユダヤ人の自己理解の中心的要素をなす。歴代誌 16：13, 詩編 89：3 (新共同訳 89：4), 105：6, イザヤ 42：1, 45：4, 65：9, 15, 22, シラ書 46：1, 47：22, ソロモンの詩編 3：9, 4：15, ヨベル 1：29, 1 エノク (エチオピア語エノク) 1：3, 8, 5：7～8, 25：5, 93：2, 死海写本 1 QS (『宗規要覧』) 8：6, 同 CD (『ダマスコ文書』) 4：3～4, 同 1 QM (『戦いの書』) 12：1, 同 1 QH (『感謝の詩編』) 2：13, 同 1 QPHab (『ハバクク書注解』) 10：13, シビュラの託宣 3：69, 参照。

¹⁴⁷ 終末論的な含意がある。すなわち、世の終わりの決定的裁きのとき誰が有罪判決を言い渡すのか? ローマ 2：16, 14：10, 2 コリント 5：10, 参照。

彼こそわたしたちのために執り成してくださる方です。35 誰が、わたしたちをキリストの愛¹⁴⁸ から引き離すでしょうか。苦難や困窮や迫害ですか、それとも飢えや裸ですか、それとも危険や剣ですか¹⁴⁹。36 それは次のように書かれているとおりで。

「あなたのために、わたしたちは一日中死にさらされており、
あたかも屠られる羊のようなものと見なされていた¹⁵⁰。」

37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださった方をとおして¹⁵¹、何にも優る勝利を収めています¹⁵²。38 なぜなら、わたしたちは確信しているからです。死も命¹⁵³も、天使¹⁵⁴

¹⁴⁸ ローマ 5 : 5 ~ 6, 8 : 39, 2 コリント 5 : 14, エフェソ 3 : 19, 参照。

¹⁴⁹ これらのリストについては、ローマ 5 : 3, 2 コリント 6 : 4 ~ 10, 11 : 23 ~ 27, 12 : 10, 他にヨベル 23 : 13, 1 エノク 103 : 9 ~ 15, ソロモンの詩編 15 : 17, 参照。原文はそれぞれの単語を ē が連結しているだけだが、内容から便宜的に三つに区分して訳した。

¹⁵⁰ 「死にさらされており」の原語は thanatoumetha。1 コリント 4 : 9, 15 : 30 ~ 31, 2 コリント 4 : 10 ~ 11, 参照。「のようなものと見なされていた」は elogisthēmen hōs。引用は、LXX 訳詩編 43 : 23 (新共同訳 44 : 23)。ゼカリヤ 11 : 4, 7, イザヤ 53 : 7 参照。

¹⁵¹ 原文は dia tou agapēsantos hēmās。「愛してくださった」agapēsantos というアオリスト形は、32 節「ご自身の子さえ惜しまずに、むしろわたしたちすべてに味方してその子を引き渡された方」という意味を直接的には指示するだろう。

¹⁵² 「何にも優る勝利を収めています」の原語は hypernikōmen。新約ではここにもみ出る単語、所謂 hapax legomenon。「輝かしい勝利を収めています」(新共同訳, フランシスコ会聖書研究所訳), 「勝ち得て余りがある」(協会訳), 「勝利してなお余りがある」(青野太潮訳), 「圧倒的な勝利者となる」(新改訳)「余裕をもって勝利している」(本田哲郎訳)。J. D. G. Dunn は “we prevail completely” と訳す。パウロには、hypernikaō のような接頭辞 hyper を伴う単語を好む傾向がある。hyperballontōs (2 コリント 11 : 23), hyperballō (2 コリント 3 : 10, 9 : 14), hyperbolē (ローマ 7 : 13, 1 コリント 12 : 31, 2 コリント 1 : 8, 4 : 7, 17, 12 : 7, ガラテヤ 1 : 13), hyperekperissou (1 テサロニケ 3 : 10, 5 : 13), hyperentynchanō (ローマ 8 : 26), hyperchō (ローマ 13 : 1, フィリピ 2 : 3, 3 : 8, 4 : 7), hyperlian (2 コリント 11 : 5, 12 : 11), hyperisseuō (ローマ 5 : 20, 2 コリント 7 : 4), hyperypsoō (フィリピ 2 : 9), hyperphroneō (ローマ 12 : 3), 参照。

も、支配する者¹⁵⁵も、現在のものも将来のものも¹⁵⁶、諸力¹⁵⁷も、39 高みにいるものも、深みにいるものも¹⁵⁸、他のどんな被造物も¹⁵⁹、わたしたちの主キリスト・イエスの内にある神の愛からわたしたちを引き離すことはできない、と。

¹⁵³ 「死」は5章12節から8章末尾まで一貫して、神に敵対する力として主要な役割を担っている。次に出る「命」は苦難に満ちたこの世の生に関わる(18節以下参照)。「死」と「命」については、1コリント3：22、フィリピ1：20参照。

¹⁵⁴ 「天使」は天の下層領域にあって、諸国民を支配する者。ユダヤ人や異邦人に対する神の直接的支配に敵対する勢力。

¹⁵⁵ 「支配する者」もやはり天の領域にあってこの世に何らかの支配力を行使しうると信じられていた存在。1コリント15：24参照。同じ言葉が同時にこの世の支配者をも意味しうる。この点については、ローマ13：1参照。

¹⁵⁶ 「現在のものも将来のものも」について、内容的には18～23, 28, 35参照。用語自体については、1コリント3：22参照。

¹⁵⁷ 「諸力」は、超自然的あるいは天的存在。靈的諸力。1コリント15：24参照。

¹⁵⁸ 「高みにいるもの」も「低みにいるもの」も宇宙的諸力の帰属領域による区分であろう。「諸力」以下を、「諸力、すなわち、高みにいるものであれ、低みにいるものであれ、そして」と訳す可能性もあるように思われる。

¹⁵⁹ 創造者は神を措いて他にないという点がすべての前提であることを想起させる言葉。